

栗ヶ沢バプテスト教会 25-12-21 クリスマス礼拝説教
「神のご計画、クリスマス」ヨハネ 1：6-13 木村一充牧師

クリスマス礼拝の日曜日を迎えました。神のみ子のご降誕を心からお祝いし、一緒に喜びたいと思います。その礼拝の朝、与えられた聖書の箇所は、ヨハネによる福音書第1章6節以下であります。ヨハネ福音書は「初めに言があった」という大変印象的な書き出しによって、イエス・キリストがどのようなお方であるかを描き出そうとします。すなわち、万物の創造の始めからすでに言があったこと、その言によってすべてのものが成り立ったこと、さらにこの言に命があったことを伝えるのです。この「言」は、そのまま「キリスト」に置き換えて読むことができます。「はじめにキリストがあった。キリストは神と共にあった。キリストは神であった。」そう読むことができます。「言」とは、ギリシャ語でロゴスといいます。このことから、福音書記者であるヨハネは、キリストがロゴスであるという特別なキリスト論をここで展開している、と新約学者たちは説明します。ヨハネは、マタイやルカのようにイエス・キリストの誕生物語を通してではなく、キリストがすべての人を照らすまことの光としてこの世に来られたということを、クリスマスメッセージとして語ろうとするのです。

しかし、そのあとに続けてヨハネ福音書が伝えるクリスマスのメッセージ、すなわち直後の14節が言う「言は肉となってわたしたちの間に宿られた」とはどういうことでしょうか。今朝はそこに焦点を当ててみ言葉に聞いてまいります。私たちの多くは、言葉を、それが話し言葉であれ、聞き言葉であれ、音声として聞いています。ゆえに、言葉は流れるものであり、飛び交うものでもあると考えます。流言飛語という四文字熟語が示す通りです。ところが、ヘブルの人たちにとって、「言葉」は単なる音以上のものでした。言葉は存在そのものだったのです。旧約聖書の原語であるヘブル語の単語は、全部かき集めてみても1万語に届きません。一方、新約聖書の原語であるギリシャ語のほうは20万語もあります。（ちなみに日本語はおよそ5万語だといわれます）ヘブル語は、単語の数でいうと、ほかの原語と比べてかなり少ないのです。それゆえに、ヘブルの人々は言葉を大切にし、軽々しく使用しませんでした。彼らは言葉の持つ力を重視し、言葉が及ぼす力を大切に扱ってきました。ある学者はいいます「ヘブル人にとって、語られた言葉はおそろしいほどに生きたものであった」このことは創世記1章を読んでみてもわかります。「神は言われた。『光あれ』」こうして、光があった。」神の言葉が先にあり、その後に天上のもの、地上のもの、水の中のもの、さらに人間が創造されています。言葉は、物事の先にあり、物事を創り出す力そのものだったのです。

ところで、このヘブル語の「言葉」（ダーバル）が、ギリシャ人によってギリシャ語の「ロゴス」という言葉に翻訳しなおされたとき、そこにもう一つの意味、概念が付加されました。それは論理とか原理、理性という概念です。英語の「ロジック」という言葉が示すとおりです。ロゴスはもっとも古いもので、それによって神が世界を造ったとギリシャ人は考えました。福音書記者ヨハネは、このヘブルの思想とギリシャの思想を統合して、イエス・キリストにおいて、神の精神、神の理性がこの世に来られたと言い表しました。神は、地上のすべてのものを、ただやみくもに、意味もなく造られたではありません。そうではなく、どのような命、どのような被造物にも意味があり、存在そのものに価値があります。なぜなら、すべてのものは神によって造られたからです。それは人間が作ったものに意味があるのと同じです。たとえば、私の目の前にある講壇マイクについて考えてみましょう。このマイクの素材は何で作るか。どのような色にするか。その高さをどうするか。さらに、自由に折り曲げることができるという性質も作り手は考えています。そのように思いめぐらして、作ったあとのマイクを見たとき、創世記1章に記されるように思うにちがいません。「見よ、それはきわめて良かった」その作品を喜ぶのです。クリスマスを祝うとは、そのように特別な意味を込めて神がお創りになった地上のすべてのものに、畏敬の念をもって相対し、お互いの存在を尊重し、喜び合うことです。「あなたも神に愛されている。あなたも喜んで生きることができる！」そのことを喜び合うことが、クリスマスを祝うことであります。

ヨハネはその出来事を別の表現で「すべての人を照らすまことの光があつて世に来た」と、9節の言葉で表しています。「まことの光」で「まことの」と訳されるギリシャ語（アレーティノス）は、「真実な」「真正な」という意味です。ニセモノではないということです。この世界には、人々を誤った方向に導く、間違った教え・教理を説く団体が、残念ながら今なお存在するのではないのでしょうか。あるいは、この世的な話ですが、このやり方をすれば、びっくりするほど資産運用効果がありますよと、架空の話を持ち掛けて人をだますという事例が、繰り返しニュースで報道されています。イエスが現れる前には、他の光がいろいろあつて、人々はその他の光に従っていました。しかし、それらの光は人々を本当の救いへと導くことができなかった。ある人は途中で道

に迷い、ほかのある人は暗闇の中に導かれ、そのまま置き去りにされました。それは、これほど科学技術が発展し、さまざまな情報が簡単に入手できる現代においても、変わらないのではないかと。しかし、ヨハネはそのような「偽りの光」があちこちに存在するその世界に、イエス・キリストという真実の光である方が来られたと告げるのです。この光は、いくつもの闇を照らし、それを追い払いました。第一に絶望の闇が消え去りました。第二に疑いの闇が消えました。そして、三番目に死の闇が消え去りました。先行きの見通せない今の時代にあって、イエス・キリストこそ、私たちの歩むべき道を指し示すまことの光であります。

しかし、ヨハネ福音書が書き記すクリスマスのメッセージの核心部分、コアの部分は、この後続く14節の言葉の中にあると私は考えます。それは「言葉は肉となって、わたしたちの間に宿られた」というみ言葉です。この文章は「神が人間のかたちをとる」ということを意味します。それは、ユダヤ人にとってありえないこと、肝をつぶすほどに驚くべきことでした。「肉」とは（ギリシャ語でサルクスといいます）使徒パウロが、ローマ書で人間の罪をあらわすのに繰り返し用いている言葉です。人間がいかに弱く、罪に陥りやすい存在であることを示すために、パウロは「肉」という言葉を用いました。ところが、ヨハネはその肉を神に当てはめて使っているのです。同じ言い方が第一ヨハネ、ヨハネの手紙一の4章2節にも登場します。「イエス・キリストが肉となって来られたということを公に言い表す霊は、すべて神から出たものです」と書かれています。ここでも、「神が人間となられた」ことが宣言されています。すべてを創造する神の言葉、神の理性が、イエスにおいて完全な人間性をまとったということです。もしも、神が人間になられたらどうなるか。その人間になられた神の姿を、私たちはイエスにおいて十全なかたちで100%余すところなく見ることができるのです。

なぜ、神は人間になられたのでしょうか。それは神の言葉が単に聖書に書かれるだけでなく、新約聖書の時代において、神の子が地上を歩む神となられることで、私たちがつぶさに神を理解できるようになるためです。神は私たちの悩みや悲しみ・痛みを、天上の世界から見下ろすかたちではなく、地上に来られ、人間の姿をとり、罪びとたちと共に生きるイエスを通して、その悩み、悲しみを共に担おうとされました。そればかりか、その独り子を十字架上で死なせるほどの悲しみと痛みを神は経験されました。そのことを通して、神の愛が私たちに対して真実なものとなるためであります。言葉が肉となるとは、神の言葉が目に見える出来事になるということです。私たちは、弱いものですから、単に言葉だけを聞いてもなかなか理解できません。だから神は人となられた。イエスが地上に来られたのは、神の愛を語るためではありません。そうではなく、神の愛をその生き方を通して示すためであります。

私個人のことを申し上げて恐縮ですが、栗ヶ沢教会からの招聘を受けて、今年の7月で丸4年が過ぎました。着任してからしばらくの間、私は何人かの方から「もっと強く牧師の意見を発言して、木村のカラーを出してほしい」というご意見・ご要望をお聞きしました。しかし、そのことについては控えめだったと思います。それには理由がありました。自分の意見を述べるよりも、教会員の皆様と喜びの出来事をひとつでも多く一緒に体験したかったのです。その喜びの体験がない中で、或いは少ない中で、言葉だけを語っても力にならないと思った。しかも、着任当時はコロナ感染症の影響もあり、多くの人を集めての集会さえまともに開催できない状況でした。そのような中で、今から2年半前の2023年5月19日、第1回の「賛美歌を歌う会」が開催されました。その時の週報を調べてみると、第1回の出席数は男性3名、女性8名 計11名でした。ところが、先週の賛美歌を歌う会は31名の出席者です。一回、一回の積み重ねによって小さな集まりが大きくなり、新しい出会いや出来事が起きています。教会で語られる言葉は、具体的な現実のなかで紡ぎ出される言葉ではないでしょうか。特に、この年はそのような嬉しい体験を、いくつも経験することができた1年であったように思います。

本日お読みいただいた11節のところで「言は自分の民のところに来たが、民は受け入れなかった」と書かれています。私たちはこの聖書のみ言葉を厳しく受け止めなければなりません。光は暗闇を照らしますが、同時に私たちの罪をも照らし出します。神の前で、人は自分を偽ることはできません。実際、神の光に照らされることは嫌だ、それでは困る、という人がヨハネの時代にもおりました。しかし、人間は、結局のところ、神の前にはありのままの姿でしか立つことができないのではないのでしょうか。どれほど外見や体裁をつくろっていても、神さまの目にはすべてがお見通しであります。だとすれば、まっすぐに神を見つめ、自分自身の罪、心の闇を正直に神の前に打ち明けて、すべてを受け入れ、赦してくださる神の愛の中に生きたいと思うのです。「言葉は肉となってわたしたちの間に宿られた」とヨハネは書きます。この救い主を自分自身の心の中に迎え入れ、この方を私たちの主として仰ぐことの幸いを、クリスマス礼拝をささげるこの朝、改めて心に刻みたいのであります。

お祈りいたします。